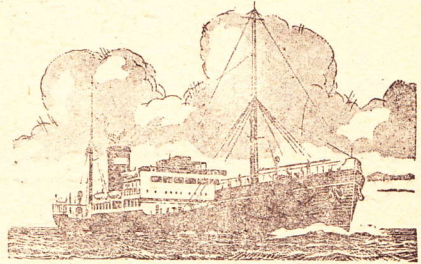


編 集 委 員

和 辻 春 樹	井 口 常 雄	横 山 涉
古 武 彌 輔	朝 永 研 一 郎	渡 邊 惠 弘
大 瀬 進	村 田 義 鑑	原 田 秀 雄
	加 藤 弘	
	編 集 幹 事	
田 宮 眞	船 橋 敬 三	藤 波 哲 太
前 田 文 雄	朝 永 信 雄	田 中 幸 正



「船の科學」編集の抱負

「船の科學」創刊號を世に送るに當つて、編集の抱負の一端を披瀝して、此の新しい技術雑誌の意義と使命を一層明確にし一般の御了解を得たいと思ひます。

本誌は凡そ「船」に親しみをもち、「船」を造るために勵み、「船」を我家として海洋を闊歩する人々にとつて、直接御役に立つことを何よりも念願してゐます。そして「船」と云ふ大きな目標に向つて皆が懸命に努力して欲しいのです。

「船」を造る人は、之を扱ふ乗組の人々の氣持を考へて細心の注意を以て最善を盡すべきでせうし、「船」を動かす人は、その能力を最高に發揮して、機械に對するいたわりの心で「船」を愛すべきでせう。此の様な考へから、「船」に關係する人は凡ゆる智識を涵養して、之を實地に即應させることが必要です。本誌の編集方針も此の廣汎な部門に互つての智識や技術を一般に廣め、造船と海運と云ふ一つの大きな世界が造船家と海運家相互の理解と助け合ひとに依つて、眞に一體となり日進月歩することを期待するものであります。従來の技術雑誌の獨善を除き、狭過ぎる専門的内容を

避け、多忙な日常を過して居られる方々が、僅かの餘暇に氣樂に讀まれ、しかも血となり肉となると云ふのが我々の望みです。

自分の役目を限定して、其の中のみ後生大事にとちこもつてゐる方々が多い様な氣が致します。少くとも「船」に關係する人は凡ゆる分野で「船」に關する直接間接の智識を必要とします。「船」はそれ程廣い間口を持ち、「船」に關係する人はそれ程博識でなければなりません。「廣く淺く」それで十分とは思ひませんが先づ之をものにしてそれから先に進むべきであらうと思ひます。本誌の目標も先づそこにあるといへませう。

「船の科學」の内容は次の様に分類してあります。

- ◇造船學（抵抗・推進・強度・振動・構造・復原性・動搖・運動論）
- ◇設計 ◇工作 ◇材料及資材 ◇進水 ◇機裝 ◇修理 ◇熔接及切斷 ◇船用機關 ◇船用電氣及計器 ◇救難 ◇工場組織 ◇漁船及木船 ◇特殊船 ◇船舶史 ◇船舶法規及經理 ◇海運（海運一般・港灣・海洋） ◇造船所だより ◇現場の聲 ◇海外ニユース及資料 ◇國內ニユース及資料 ◇海運總局船舶局欄

目

「船の科學」編集の抱負	1
「船の科學」創刊を祝ふ（大瀬 進）	2
造船技術の正道化（朝永研一郎）	2
船舶修繕管理の現状（中西 久）	3
錨の鋭き爪（立川春重）	5
船の轉覆と波（越智和夫）	7
船の機裝（三田一也）	9
造船用鋼材（菊池浩介）	11
沿岸航路貨物船の設計について（山縣 彰・赤津誠章）	14
船を造る者の立場から（木田富藏）	18
陸海空各輸送機關の優劣について（米原令敏）	19
造船所便り（播磨造船所・三菱横濱造船所）	22

次

鯨鮪漁船の一轉換（高木 淳）	23
米國に於ける熔接船の損傷と其の對策（川島榮一）	25
船舶電氣設備の將來（三枝守英）	27
鐵道連絡船摩周丸	29
國內ニユース	31
海外ニユース	33
海外資料	36
戦後新造船一覽表（其一）	38
「メーカー」一覽表（其一）	39
船舶資材	40
表紙寫眞は飯野産業舞鶴造船所のドック	



## 「船の科學」創刊を祝ふ

海運總局船舶局長 大 瀬 進

戦後永い間不況の底に沈淪してゐた我が造船界にも、最近漸く希望の光がさして來た様に感ぜられます。その一は、今後本邦で造られる日本船舶に、外國船級協會の船級を取得する途が開かれた事、その二は、輸出船の建造が許可され、木船ではソ連向の曳船及び舢舨が相當數建造されつつあり、鋼船ではノルウェー向の捕鯨船が建造中である事、その三は、日本の造船所で一般外國船の修繕を行ひ得るようになった事であります。これは我々造船關係の仕事に携つてゐる者としては特に喜ぶべきことでありますが、同時にそれが皆連合國軍總司令部の厚意によるものであることを銘記することが必要であります。即ち我々は誠心誠意を以て事に當つて、その厚意に應へなければなりません。私は斯くする事が同時に本邦造船海運の復興にも寄與する所以であると確信致すものであります。ところが日本の造船に關する技術は、戦時中戰艦の量産に追はれたため著しい質的退歩を餘儀なくされ、未だ戦前の水準にも回復してゐないのであります。斯かる現状は連合國軍總司令部の厚意に報ゆるためにも又本邦海運の再建のためにも、一刻も早く打開しなければならぬのであつて、海運總局においても過般船舶技術協議會を設け、造船技術の可及的速かな回復を圖り更にその進歩發達を促進するための方策を討究してゐる次第であります。

此のような時機に造船海運に關心を持たれる若い方々の熱意によつて「船の科學」が誕生創刊されましたことは、誠に意義深いことでもあります。本誌は、造船海運に關する綜合技術雜誌であつて、その内容も理論に偏することなく造船海運の廣い分野においての技術、智識の交流を主眼とするもので、日常の劇務の餘暇にも楽しく讀めることが特色であります。寥々たる造船技術雜誌のうち斯かる使命を帯びた「船の科學」が生れ出たことは誠に慶賀に堪へません。月を重ね年を重ねると共に益々發展する本誌の將來を心から祝福する次第であります。

## 造船技術の正道化

朝 永 研 一 郎

戦時中の所謂“勝たんがための生産増強”は結果として粗製濫造の弊を生んだこと我が國では周知の事實である。造船工業もこの例に漏れず折角我々の先輩が明治維新以來或は先進國に學び或は自らの刻苦精勵に依り體得した技術はこの數年間に甚しく原始的のものに逆戻りしたことを否み難い。これは残念千萬のことに違ひないが然しこの事實そのものはなほ忍ぶべきである。最も忍び難いのは戦時式の設計法工作法が技術の常道であるといふ觀念である。戦時式のやり方は止むを得ざるに出でたのだといふ觀念であるならば平和になれば正道に復する見込がある。これが當り前のやり方だといふのであつては立ち直りやうは無い。現在最大の急務はこの觀念の是正ではあるまいか。資材、金融、人員の補充等に對する措置の如きもこの正道技術の觀念の上に立つのでなくては無意味である。

これは口や筆で論ずることは簡單であるが實行には中々の困難が伴ふ。現在造船作業實施の第一線で活躍して居る人の多くは戦時中に修業した人で昔からの正道で育つた人はもはや大抵退いて居る。又昔からの貴重な記録で戦災その他のため焼失烟滅したものが多い。正道への立て直しのむづかしさが分る。

然しこれは是非やらなければならないことである。やり方にはいろいろあらうが“船の科學”が造船學術技術の普及化と共にこれを大きな使命の一つとして進むことを望んでゐる。これは大にやり甲斐のある仕事である。編集同人も努力することは勿論であるが老練なるこの道の先輩諸氏もこの意味で本誌のために十分の協力あらんことを切望する。それと共に若い方々も先入に囚はれないフレッシュな立場で大に正道技術を論じて貰ひたい。ここに始めて正道の線に沿うての技術の進歩が期待し得ると思ふ。